

The
TIME
is
NOW

源流の郷

vol.04

2023.10

全国源流の郷協議会

源流を守り、
国土保全を推進する市町村連盟



源流と流域の力を結集しよう！ 全国源流サミットの歩み

今年で14回目を迎える全国源流サミットは「全国源流の郷協議会」加盟自治体による持ち回りで毎年開催され、源流の素晴らしさや大切さを広く発信してきた。世界的なSDGsへの意識の高まりと自然災害への取り組みに関心が集まる中で源流と流域の役割と責任がさらに重要となった今、改めてこれまでの歩みを振り返ってみたい。

第1回 山梨県道志村(相模川水系道志川源流)

2010年10月22日～24日(平成22年)



第2回 岡山県新庄村(旭川源流)

2011年10月21日～23日(平成23年)

パネルディスカッション
テーマは「源流に新たな光を照らす」。

第3回 高知県津野町(四万十川源流)

2012年10月22日～24日(平成24年)

東京大学名誉教授の高橋裕先生から「源流白書」に関する貴重な提案をいただく。



第4回 群馬県みなかみ町(利根川源流)

2013年7月5日～7日(平成25年)

サミットテーマは「真の流域連携とは何か!?ともに語りつなげよう」。源流×流域パネルトークでは「そこが知りたい!これが知りたい!うちの流域連携・自慢と課題」をテーマに会場は大いに盛り上がった。

第5回 奈良県川上村(紀の川吉野川源流)

2014年9月5日～7日(平成26年)



第6回 長野県根羽村(矢作川源流)

2015年9月4日～6日(平成27年)

サミットテーマは「流域はひとつ、運命共同体～源流には元気の源がある」。



パネルディスカッション
テーマは「源流 守る・活かす・生きる」。

第7回 愛媛県松野町(四万十川源流)

2016年7月29日～31日(平成28年)

「源流サミット本大会」は、多摩川流域に位置する東京都世田谷区二子玉川の会場で開催された。

第8回 東京大会

2017年10月12日～13日(平成29年)

パネルディスカッション
テーマは「流域連携による持続可能な社会づくり」。

第9回 島根県津和野町(高津川流域)

2018年10月19日～21日(平成30年)

台風19号のため
開催中止に。

第10回 奈良県黒滝村(紀の川吉野川源流)

2019年10月11日～12日(令和元年)

テーマは「今こそ戻ろう、源流に～源流と都市の付き合い方～」。



第11回 源流サミット(特別編)

2020年11月30日(令和2年)

～新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン開催～

第13回 三重県大台町(宮川源流)

2022年10月26日(令和4年)

オンライン開催

パネルディスカッション
テーマは「源流のまちから子どもたちに伝えたいこと」。



第14回は、 久慈川水系源流域の 福島県塙町で開催！

2023年10月12日～13日(令和5年)

町の中央に久慈川が流れる豊かな自然に囲まれた穏やかな人情あふれる町で、ダリアの咲く“花のまち”としても人気。

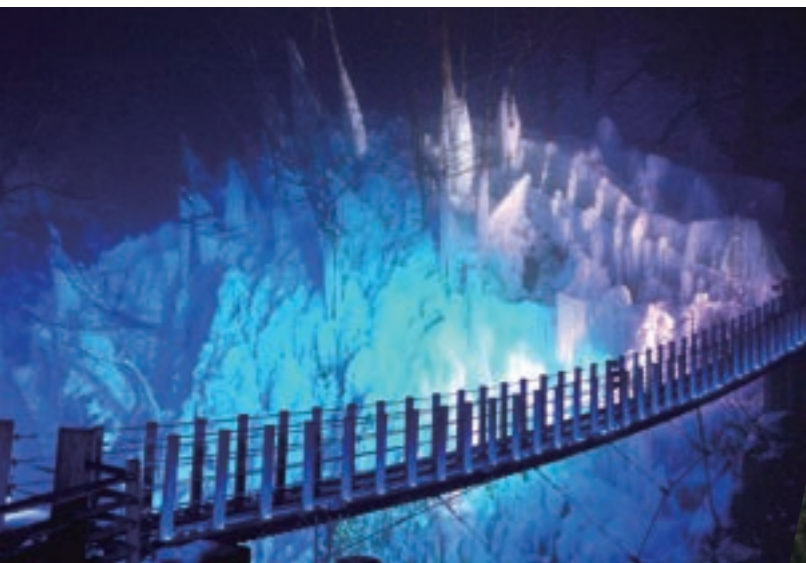
源流の価値を 広く伝えていくために

「全国源流サミット」は2023年開催で14回目を迎える。台風や新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止やオンライン開催にもなったが、10年以上に渡り、国土保全の要である源流域について発信を続けてきたことはとても意義深い。活動の中で源流域の価値や重要性を取りまとめた「源流白書」を発行し、源流への理解を広く呼びかけた。日本の源流域は国土保全、および環境保全の最前線である。SDGsへの意識の高まりや気候変動による自然災害への取り組みに関心が高まっていることから、源流の郷と流域のまちの役割と責任は今後ますます大きくなっていくだろう。今こそ源流と流域の力を結集し、源流から日本の未来を考えていきたい。

OUR ACTION ④

森と水、攻めの発想で価値を高める

水源地を守る源流域の自治体にとって、森や水という豊かな自然は他の地域にはない大切な財産である。保全管理はもちろんだが、自然との「共生」を強く意識することで源流域ならではの魅力をさらに高めていくこともできるのだ。



尾ノ内水柱

尾ノ内溪谷から水を引いて人工的に作った氷柱。ライトアップされた景色は美しく、小鹿野の冬の観光スポットだ。



両神山

ノコギリのような尾根と切り立った岩壁が特徴的で、山岳信仰の場としても有名だ。日本百名山の一つに選定されている。



丸神の滝

埼玉県内で唯一「日本の滝百選」に選定された名瀑。3段からなる落差76mの滝は圧巻で、四季折々の姿を楽しめる。



両神山清滝小屋

現在は避難小屋として解放されている清滝小屋。両神山をもっと楽しんでもらうために、周辺整備の計画が進んでいる。



毘沙門水

白石山(別名:毘沙門山)山腹から湧き出るミネラル分が豊富な水で、「平成の名水百選」に選ばれている。

荒川源流 埼玉県小鹿野町

自然を保全しながら活用する発想が潜在的な観光消費額を高めてくれる

小鹿野町では“自然を保全しながら活用する”取り組みが進んでいる。日本百名山の一つである両神山を源流とする尾ノ内溪谷から水を引いて人工的に作った氷柱もその一つだ。周囲250m、高さ60mにも及ぶ氷柱は冬の人気観光スポットとなっている。小鹿野町まちづくり観光課 坂本芳紀さんは、豊かな自然を保全しながら上手に活用する発想が大切だと語る。「尾ノ内氷柱は西秩父商工会青年部メンバーの何気ない発想から始まりました。美しい水が流れる小鹿野町の自然を活用し新しい観光名所を創造する試みとして行政も全面的にサポートし、人気スポットに育ててきました。日本は文化資源を観光につなげるのは得意ですが、自然資源を観光につなげるのはあまり得意ではありません。源流域のこれからの観光事業は、自然の素晴らし

さや魅力を保全しながら上手に活用する柔軟な発想が必要ではないかと思っています」

現在、小鹿野町では秩父多摩甲斐国立公園にある両神山の山小屋整備を計画中だ。山岳信仰の場としての荒々しさを持ち、同時に花や紅葉の美しさでも人気を集める両神山には、年間3万人が訪れる。その両神山の自然を保全しながら時代にあった整備をしていくことで利便性や快適さが加わり、訪れた人たちの満足度を上げ、さらに多くの人を呼び込み、“観光消費額”を高めることにつながると坂本さんは考えている。

「小鹿野町の豊かな自然を資源に自由な発想と行動力で心地よさや楽しさ、新しさをプラスできれば、宿泊、飲食などの新たな消費を掘り起こしていけると確信しています」

矢作川源流 長野県根羽村

森林を村の最大の価値とし、「SDGs未来都市」を目指す

村の92%が森林という根羽村。森林こそ根羽村の最大の価値だとし、「森と生きていく」方針を掲げている。その想いは村長が森林組合長を兼ね、村の全世帯が森林組合員であることからわかる。根羽村役場振興課 平松綾乃さんが森林を起点とする根羽村の取り組みについて教えてくれた。

「根羽村が森林に力を入れる理由は村独自の森林所有構造にあります。全世帯が山持ちのため“自分たちの森は自分たちで守る”という意識が根付いています。根羽村では源流域の森林の価値を高めるためFM認証^{※1}やCoC認証^{※2}などを取得しています。他にも根羽杉や根羽桧など地域材のブランド化や全国の木育イベントへの出展など、根羽村の森林の価値を高めるさまざまな取り組みを続けています」

また根羽村は2022年に「SDGs未来都市」^{※3}に選定された。SDGs目標15「陸の豊かさを守ろう」の取り組みである森林保全に加え、地球温暖化による水災害への対策として流域連携をより強固なものにしようとしている。持続可能なまちづくりのためには流域連携は欠かせないと平松さんはいう。



矢作川源流域

矢作川は長野県、岐阜県、および愛知県を流れて三河湾に注ぐ。その源流域に根羽村はある。

木育イベント

根羽村森林組合では森林整備・木材製造だけでなく、森の啓蒙活動を目的に木育活動も積極的に行っている。



サステナブルな森づくり

根羽村はFM認証やCoC認証を取得し、適切な管理や流通、加工であることを明確にしている。



「根羽村は下流域の愛知県安城市と環境育林協定を締結し、森林整備、上下流域の交流、針広混交林への転換などを協働しています。根羽村だけでは難しいことも流域連携することでやれることは広がります。源流域の役割に関心を持つ人々を増やし、根羽村の森林の価値と評価を高めていく取り組みをこれからも進めていきたいと思っています」

※1: FM (Forest Management: 森林管理) 認証とは適切な管理がなされている森林を認証する制度。
※2: CoC (Chain of Custody: 加工流通過程の管理) 認証とはFM認証を受けた森林から産出された木材・紙製品を、適切に管理・加工していることを認証する制度。
※3: SDGs未来都市とは内閣府がSDGsの達成に向けた優れた提案をする都市を選定する制度で、選ばれた自治体は新しい価値観で持続可能なまちづくりをすることが求められる。



根羽村森林組合

根羽村では行政と民間が一体となり森林組合を運営し、村長＝組合長という伝統が続いている。

根羽杉

美しい色合いとしなやかさ、そして強度があると評価されている根羽杉。根羽村では木材のブランド化を進めている。



負の構造物を人気インフラツアーに変えた “想像と創造”の力



砂防ダムとしては珍しい鮮やかな朱色の鋼製フレームで造られた「ガン沢砂防堰堤」。

川の流れを安定させる流路工がJRの路線上を通過する「常蔵沢砂防堰堤」。



鋼製フレームの透過型ダム「黒川沢里見第2号砂防堰堤」。



長野県最北西部の小谷村では、砂防ダムをめぐりインフラツアーが人気を集めている。小谷村は姫川が村を貫流する自然豊かな地域ではあるが、フォッサマグナの境界面「糸魚川-静岡構造線」*1上に位置しているため地盤が弱く、昔から土砂崩れや地滑りなどが多かった。数多くの砂防ダムが造られ、新旧含めるとその数は約300にもなるという。小谷村観光連盟 観光シニアコーディネーターの伊藤嘉一さんが、満員御礼が続くインフラツアーについて教えてくれた。「砂防ダムは自然災害が多いことを前提とするいわゆる負の構造物です。それでもツアーとして人気となったのは砂防ダムができた背景、地形、地質、歴史などを織り交ぜて、専門知識を持ったガイドが詳しく解説する構成になっているからだと思います。午前8時に集合して8時間かけてインフラ関連をめぐりツアーもあります。参加者には50枚近くの解説資料を配ることもあり、好奇心を満たす満足度の高い内容になっています。砂防ダムは貯水ダムと違ってさまざまな形があ

りますので、インフラとしての重要性だけでなく構造物としての面白さ、アート性も楽しむことが可能です」

参加者の多くがSNSで発信してくれるため、PRに予算をかけることもないそうだ。ツアーは企画当初から話題を集めてきたが、2022年に10周年記念としてリリースした「新おたりの砂防ダムツアー」*2がさらに人気に火をつけた。2023年の新ツアー「おたりの直轄砂防ダムめぐり」*3は、なんと予約開始日に受付から約4時間で満員御礼になったという。「日本各地にはそれぞれ観光資源があると思いますが、それらをどう生かすかは“想像と創造”が必要だと思います。つまり発想力と行動力です。小谷村は負の構造物である砂防ダムを観光資源とする発想でツアーを実現させ、多くの人に村を訪れていただいています。源流域や森や川などの自然を守る大切さや災害との向き合い方についても、ツアーの中でお話をしています。これらのことを学びとして持ち帰ってもらい、ツアーの役割だと思っています」

*1: フォッサマグナとは東北日本と西南日本の境目となる地質学的な溝で、小谷村はその境界面上にあり柔らかく崩れやすい地質のため土砂災害が多い。

*2: 2つの流路工と11の砂防ダム(堰堤)を丸一日にかけてめぐりツアー。

*3: 国土交通省管轄となる直轄砂防ダム(堰堤)にスポットを当てたツアー。普段は立ち入ることができない現場を見学できるため注目を集めている。

第14回 全国源流サミット開催!!

久慈川源流
福島県塙町

2023年(令和5年)
10月12日(木)~13日(金)

源流の重要性を再認識する

第14回 全国源流サミットは福島県塙町にて開催いたします。「山水花のまちづくり」を基本理念とし自然に寄り添う暮らしが息づく塙町から、生命の源である「源流」の重要性について考えます。

CONTENTS

10月12日(木)

15:00~17:00 源流視察(河童のすり鉢遊歩道、ダリア園)

18:00~20:00 首長交流会

10月13日(金)

9:30~11:30 全国源流の郷協議会 首長サミット

参加自由・参加費無料

13:30~ 全国源流サミット(塙町公民館 2階 研修室)

・開会行事

14:00~

・基調講演

「私たちの暮らしと源流文化」

東京農業大学 名誉教授 宮林茂幸氏

15:00~

・パネルディスカッション

テーマ「源流と共に生きる私たち」

コーディネーター: 東京農業大学 名誉教授 宮林茂幸氏

パネラー: 福島県内水面水産試験場調査部長 島村信也氏

久慈川第一漁業組合 理事 芳賀正光氏

フォトグラファー 芳賀元昌氏

森の案内人 佐川美子氏

森林ヨガ講師 阿久津睦子氏

16:30~

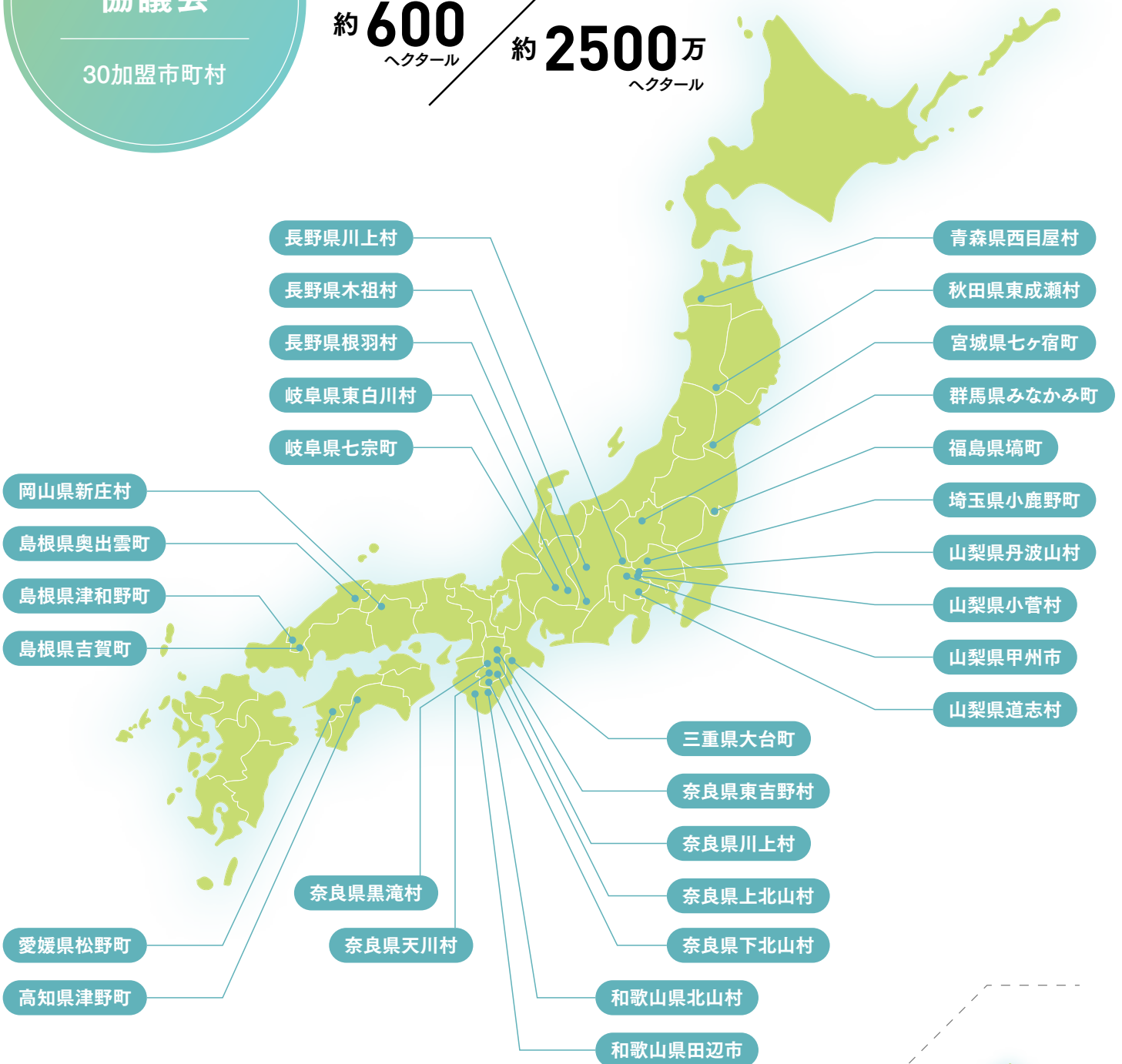
・閉会行事

全国源流の郷 協議会

30加盟市町村

日本の森林総面積に占める
源流の郷が保有する森林面積

約 **600** 万
ヘクタール / 約 **2500** 万
ヘクタール



源流を守り、国土保全を推進する市町村連盟 (14加盟市町村)

- 東京都稲城市
- 東京都狛江市
- 長野県南木曾町
- 長野県木曾町
- 長野県大桑村
- 長野県上松町
- 長野県塩尻市
- 長野県白馬村
- 長野県小谷村
- 奈良県御杖村
- 奈良県十津川村
- 奈良県野迫川村
- 三重県亀山市
- 高知県須崎市

2023年10月現在

全国源流の郷協議会 事務局

源流を守り、国土保全を推進する市町村連盟 事務局

小菅村役場 源流振興課 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4698 TEL.0428-87-0111

表紙写真：色とりどりに咲き誇る
グリア園(福島県塙町)